

講演Ⅱ

多元主義社会における伝道

—キリスト教の絶対性要請の視点から—

橋本昭夫

1. 多元主義社会の「出現」¹

「人種のるつぼ」という表現がある。この表現は、規模の大小こそ違い異なるさまざまな民族が共存するようになった地域について言われうる。そして米国はその典型であろう。ヨーロッパ、アフリカ、アジアの諸地域から、諸民族が、それぞれに細分化された宗教、文化、慣習などを背負って集まってくる。そのような米国においては「同化」の面とそれぞれ固有の価値を保持する「個別主義」が並存していると言えよう。ある意味では多元的であったと言えよう。しかし、これまで、米国では、今日で言われるような意味で、「多元主義」が、大きく叫ばれることはなかったのではないか。あるいは、米国は多民族的ではあっても、いわゆる「WASP」が代表する宗教、倫理、文化、慣習などが、建国当初の基本的な価値に、後発の移民たちは、同化を

¹ 本稿は、2008年秋に行われた全国研究会議で発表したときの原稿を、時間の余裕を得て推敲し、注を施し、不必要な文言は削除、必要な点を補筆したものである。そのため、全体の方向は変わらないが、細目では異なっている。また応答者・桜井園郎氏の指摘に応じて説明を加えた。そのため、桜井氏の当初の応答と整合的でない面も出てきている。それに関連して何かの不都合が生じるとすれば、その責は、桜井氏ではなく筆者にあることをお断りしておきたい。詳細は、筆者からの桜井氏への再応答に記した。

志して行ったということができよう。後発の移民たちは、自らの諸価値を「私的」空間において保持しつつも、公的な場にあっては「WASP」が代表する一元的社会に順応していったからではなからうか。つまり一元的原理が強ければ強いほど、多元主義的な問題意識が表面に出てこないということであろう。堅固であった一元主義が崩壊するところでこそ多元論が強く感じられるのであろう。

「グローバル・ビレッジ」となった現代世界で、今あらためてその現実が多元的であると言われている。そのような現実を論じるにあたって、まず「多元化」、「多元主義」、「多元主義社会」などの概念が、どのような内容のものであり、どのようなコンテキストで論じられてきたのかについて触れておきたい。これらの概念をめぐる論議は、多岐にわたるが、まずは「多元主義」なる語について一言しておく必要がある。この「多元主義」という語にも、さまざまな用例があるが、筆者が、本論稿で理解しているのは以下のとおりである。「多元主義」は、英語でいう pluralism であり、意味は、一般的には、相互に異なる複数諸事象の並存を記述するものであろう。そしてここでの関心の中心である religious pluralism という用語も、それに準じ、諸宗教が経験的・現象的に並存している状況を記述するものであり、その状況を既定の事実として認識し、かつそれに基づいて諸宗教の中におけるキリスト教の位置を見定めていこうとするものである²。当然そこにはたんに経験的事実を記述するだけでなく、「かくあるべし」という規範的な意味も同時に含むであろう。また多元主義および宗教多元主義という二つの概念であるが、厳密には前者は上位のそれであり後者はその下位にある。ただ多元的現実、宗教の領域に孤立的に言われるだけではない。その意味で、本稿が多元的現実にある日本での伝道を考えるという文脈上、宗教的多元主義を中心におくとし

² Religious pluralism をそのように理解する例として Stanley Samartha の一文は参考になろう：“Religious pluralism today is not just an academic issue to be discussed but a fact of experience to be acknowledged,” from “Some Glimpses into the Theology of Dr Stanley Samartha” by S. Wesley Ariarajah, WCC 2002, at <http://www.wcc-coe.org/wcc/what/interreligious/cd38-03.html>

ても、広く多元的現実をその視野においていることを記しておきたい³。

日本における多元主義状況とはどのようなものか。諸宗教の林立・並存は言うにおよばず、倫理的価値にしる、政治的理念にしる、経済をどう運営していくかの方策にしる、どの分野においても異なる観点や主張の存在は自明であるし、それはいまに始まったことでもない。ただ、現在、日本においても、いま「多元主義社会」というテーマが論じられるとすれば、そのことが新しい社会学的現実がすでに認識されているということであろう。そして、そのような社会学的潮流をとくに感じているのは、日本における神学であり、今日に至って福音主義神学である。その関心となっているのが宗教多元主義神学である。本論究はそのような神学的文脈の中にあるが、このテーマを論じるにあたり、一つの留意事項がある。つまり、宗教多元主義は、日本の宗教状況の内からのものではなく、「輸入概念」であるということである。とりわけ欧州発である。それにもかかわらず、なお日本における伝道の働きに関連づけて論じようとするのは、以下の理由による。すなわち、日本の福音主義神学は、総じて欧米伝統的神学の「キリスト教絶対主義」を踏襲している。日本の教会は、諸宗教が並存する状況下にあったが、諸事情により、これまでそのような状況を十分に顧慮する余裕もなく伝道の働きを進めてきた。ところが、前世紀の後半から欧米においてキリスト教の絶対性への疑義が提出

³ 諸宗教が並存している状況を記述するものとして「多元」という用語がどう用いられているかについて、一言する必要がある。小原克弘氏は「今日の宗教多元的状況の中で、キリスト教の絶対性をめぐる神学的課題はすでに古典的になったかのように思われる」というように用い（「キリスト教の絶対性の解釈の諸問題」、『基督教研究』54/1）、また同様の状況を記述して「宗教的多元性」という用語を使い、「……もっとも宗教多元的状況を太古の昔から今に至るまで経験的事実として知っているアジアやアフリカのような地域と支配的宗教の足下をゆるがすような形で宗教の多元化が進展しつつある西欧社会とでは、同じ宗教多元性という言葉であっても意味はまったく異なる」（『現代神学における宗教的多元性——グローバル化する世俗社会の行方』『宗教研究』329号）というように使っている。なお同氏は宗教多元性には diversity of religion を考え、宗教多元主義には religious pluralism を当てている。一般的には多元も多様も相互交換可能な概念である。

され、宗教多元主義の名のもとにすでに多くの書物が世に送り出されている。そして問題は、近年の宗教多元主義神学が一つの出発点としている、伝統的なキリスト教絶対主義への批判、それについての再考を必要だとする認識である。それはとりもなおさず、宗教多元主義神学が欧州において提起している問題は、日本の福音主義教会にも向けられていると理解しなければならない。以下はその問題についての論究であるが、まずその「輸入元」である西洋の——とりわけ欧州の——問題意識を方法として論じることから始めたい⁴。

欧州は、歴史的に長くキリスト教を一元とする世界であった。構成する人間も、ほぼ「ヨーロッパ人」という総称が可能なほど同質であり、EUの成立を可能にするほどの同一文化を継承する世界であった。しかし、欧州諸国の植民地統治の歴史的背景、近年の非キリスト教国からの労働力の需要、キリスト教に基づく人道的寛容、また地理的近接などから、中近東、アフリカおよびアジアから多くの非欧州人を受け入れてきた。たとえばフランスには現在六百万人のイスラム教徒がいると言われている。総人口が六千万強であるから10%に及ぶ。このような状況のもと、欧州諸国の政府が、新しく国民となった諸民族の宗教を尊重し具体的な施策を講じている。そこでは、日本とは異なった意味で、諸宗教の並存が未曾有の現実として眼前にある。

むろん、欧州においても広い世界に多くの宗教が存在するということは以前から知られていた。19世紀のプロテスタント宣教運動の中で、アジア、中近東、アフリカに、さまざまな宗教や宗教思想のあることを宣教師たちの働きをとおして知っていた。その関連で「宗教学」が生まれた。とは言え、近年に至るまで、諸宗教の存在は、一般の人々の意識においてはまだまだ「抽象的」の域にとどまり、宗教多元的状况として具体的に感じられることはな

⁴ 杉田俊介氏は、「インマヌエル思想」で知られる滝沢克己を「日本における『ヒックの先駆者』」と位置づけ、宗教多元主義批判を展開している論文の中で、遠藤周作の『深い河』[講談社、1993年]が[ジョン・]ヒックの影響を受けて書かれたもので、間接的に宗教多元主義に触れた人はたくさんいるはずだ」と指摘している（「宗教多元主義思想についての批判的考察——滝沢克己を中心にして」『基督教研究』69/1、ちなみにこの論文で杉田氏は滝沢氏の所論を手がかりに、宗教多元主義神学にひそむ排他性の傾向を指摘している）。

かった⁵。しかし第二次大戦以降、植民地として統治されていた国々が独立を果たし、それぞれ固有の宗教や文化伝統を民族のアイデンティティーの確認の要素として見直すというような動きが出るようになった。そのことに連動して、起こってきたのがそれぞれのところでの諸宗教のルネッサンス現象である。そして、その現象は、さらに広く波及して、欧州のそれぞれの国に定着し、そこを自分の国とするようになった人々、つまり人種的に非欧州人である人々の意識にも反映されるようになる。

このような関連で、キリスト教に対する批判が、かつての植民地であった国々からなされてきたが、批判はただそこからだけではなく、欧州および米国の神学者からも提出されてきた。いわく、キリスト教絶対性の主張は、西洋優越主義を前提とした宗教的帝国主義と重なりあう、またキリスト教徒たちによってなされた搾取や抑圧や暴虐などが今日の世界の諸問題の源をなしている、そのような問題を見るとき、それらの解決のために、まず克服されなければならないのはキリスト教の絶対性の主張である、今日なおそれを主張するのは時代錯誤的である、と。このような現象は、西洋近代の行き詰まりと過去の植民地主義時代の反省とが重なりあう罪責感的コンプレックスであろう⁶。また、ことがらを複雑にしているのは、現代世界の物資万能主義的

⁵ それを示すJ. ヒックの回顧がある：“In those days [that is, ‘some sixty years ago], like most of my generation, I had never met anyone of another faith and knew virtually nothing about the other world religions—and that little I knew has turned out to be largely caricature,” in *Is Christianity the only true religion, or one among others?* (A talk given to a Theological Society in Norwich, England, 2001), <http://www.johnhick.org.uk/article2.htm>.

⁶ ヒックは次のように西欧・キリスト教の歴史的行跡を記している：“History of Christian Europe has been “the centuries-long persecution of the Jews, the Crusades, the burning of witches and heretics, the conquest and exploitation of what today we call the Third world, the carrying off so many of its people as slaves, the history of Christian Europe through the twentieth century, which saw two terrible wars between Christian nations in which tens of millions were killed, and the Jewish Holocaust, and churches supporting Fascist dictators in Italy, Spain, Brazil, San Salvador, Chile (the most recent being General Pinochet), and for a whole generation supporting apartheid in South Africa...” 上掲書。

な現実理解であろう。物質的（経済的）繁栄を「最高善」とする思想が蔓延してきた結果と言えよう。それらは、キリスト教信仰が伝統的に保持していた倫理的価値基準をなしくずしに相対化し、またその根拠となっている客観的な規範の存在を否定することにつながっていった。

すでに冒頭の部分で触れたように、福音主義的教会は、キリスト教信仰の絶対性を大前提とする伝統的神学を諸ミッションから受けつぎ、日本の多元的現実をあまり顧慮することなく、主イエス・キリストの福音の絶対性の確信に立って伝道に励んできたが、これまでの日本の福音主義的教会は、いわば、揺籃期の余裕のなさから、すでにそこにあった日本の宗教多元的現実⁷を通り過ぎてきたように思われる。しかし、この多元主義化した現在、とりわけ欧米発の宗教多元主義神学およびその主張であるキリスト教相対化が間接的な挑戦として感じられているのである。そこで福音主義神学が求められているのは、キリスト教の絶対性、より具体的には、主イエス・キリストの絶対性について洞察を深めることであり、「唯一の救いの道」である福音をこの日本の宗教的相対主義が優勢なこの現代日本でどう伝えていくか再考することである。

II. 宗教多元主義と一神教批判⁸

21世紀に入ってほどなく「9・11」事件が起った。その直後に、アメリカを中心とする欧米勢力とイスラム「過激」集団との戦闘が始まった。戦闘が今日まで続いている。その理由として俗に以下のように考えられている。いわく、アラブ・中近東世界とイスラエルを含むアメリカを中心とする欧米の戦いは、つまるところ、「一神教」のなせるわざである、イスラム、ユダ

⁷ ヒックは、その著である *The Rainbow of Faiths—Critical Dialogue on Religious Pluralism* の邦訳に寄せた序文参照（『宗教がつくる虹～宗教多元主義と現代』問瀬啓允訳、岩波書店、1997年）。

⁸ キリスト教が、宗教学的に一神教の範疇に入るのかどうかについては、どの文脈での言及なのかによって判断されよう。三一神論は独自の神観であるとしなければならぬがここでは、とりあえずその一神教の範疇に入るものとする。

ヤ教、キリスト教は、「共通の聖書」を經典とする宗教で、いずれも「一神教」、その「思想は『一元主義・普遍主義』と見ることで」、⁹「自己のルールを強烈に押し出し、押付け、世界を『自己のルール』で統一しようとする、だから戦争を仕掛けることも『神の御意志に』従うということになる」と。また、ヨシュア記は「カナン征服記」として、「激しい侵略戦争」の展開であり、「随うものは救い、逆らうものは殺してもよいという、独りよがりの恐ろしい存在が、聖書に示されてきた『神』であります。愛と寛容とは真逆（マ）に位置しています」とも言われてもいる⁹。しかし、興味深いことに、日本においてこのような「一神教」理解は、目新しいものではなく、すでに明治二十年代にそのまま主張されていた。ときの東京帝国大学教授・井上哲次郎が、内村鑑三不敬事件に関連して論じている——「内村氏が此の如き不敬事件を演ぜしは、全く其耶蘇教の信者たるに因由すること亦疑なきなり。耶蘇教は唯一神教にして其徒は自宗の奉ずるところの一個の神の外は、天照大神も弥陀如来も如何なる神も如何なる仏も決して崇敬せざるなり。…多神教たる仏教は古来温和なる歴史を成し、唯一神教たる耶蘇教は到る処激烈なる変動をなせり。内村氏が勅語に敬礼することを拒み傲然として偶像や文書に向ひて礼拝せずと云ひたるは、全く其信仰する所唯々一個の神に限るに出るなり……」¹⁰。

はたして多神的な仏教が、井上の言うように「古来温和なる歴史を成し」たかどうかは別に問うことにしても、ただ当面の課題は、「一神教が戦争の元凶であって、多元的・相対的信仰こそがこれからの世界を救う、したがって宗教のいずれであれ絶対的・排他的にとどまるかぎり、それは克服されねばならないものである」という主張を吟味することである¹¹。

⁹ <http://www.asyura.com/0510/bd42/msg/1061.html> にある書き込みである。この種の書き込みは枚挙にいとまがない。

¹⁰ 久山康編『近代日本とキリスト教・明治編』（創文社、1956年）、204頁。

¹¹ 「一神教」という神論的範疇に入れられるキリスト教の歴史が（旧約）聖書の「好戦的傾向」（「ある種の恐ろしい」「戦いの遺伝子」）を首肯させるかのような歴史のあったことも、たしかに考慮すべき事実であろう。またヨシュア記などに見られる旧約的戦記物語を正典に含められたものとして、どう理解し、どのよう